群馬県

明治・大正の文学

根岸謙之助

TAN

群馬県

明治・大正の文学

根岸謙之助

みやま文庫59

（みやま文庫　59）

昭和50年９月１日印刷
昭和50年９月10日発行　会員頒布（会費年間2,200円）

編集者代表　相葉　伸
発行者代表　前原盤根
印刷者　開文社印刷所

発行所　みやま文庫
〒371　前橋市城東町二丁目３～３
群馬県立図書館内

昭和50年度第２回配本

目次

表紙　金井民子

明治前期

旧派の人々

旧派和歌の世界……（二）

俳諧の宗匠たち……（一五）

狂歌の点者たち……（二五）

近代詩の花開く

湯浅半月と「十二の石塚」……（二八）

ジャーナリスト磯貝雲峰……（三九）

「抒情詩」と田山花袋……（四二）

明治後期

歌謡詩人の活躍

民謡詩人平井晩村……（四八）

童謡作家石原和三郎……（五三）

新しい短詩型文学

根岸派の歌人村上成之……（六二）

俳人村上蚋魚……（六七）

鬼城文学の世界……（六九）

倉田萩郎と「いなのめ会」……（七三）

「明星」派の影響……（七六）

散文精神としてのリアリズム

田山花袋の日本的自然主義……（七九）

山口寒水の社会主義リアリズム……（八六）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大正期

モダニズムの詩人達

薄倖の詩人山村暮鳥……（九五）
虚無と倦怠の漂泊者萩原朔太郎……（一二〇）
密室の詩人大手拓次……（一四〇）
萩原恭次郎と未来派の運動……（一五二）
高橋元吉に於ける白樺派の影響……（一六六）

近代短詩型文学の成熟

土屋文明と須藤兄弟……（一七七）
「キツネノス」の歌人たち……（一八六）
短歌結社と上毛新聞……（一九二）
ホトトギス派の俳人たち……（一九九）

自然主義と労働者文学
中沢静雄のリアリズム……（二一〇）
新井紀一と根岸正吉……（二一九）
あとがき……（二三三）

明治前期

旧派の人々

旧派和歌の世界

ざんぎり頭をたたいてみたら

文明開化の音がする

いわゆる御一新によって、江戸が東京と改められ、新政府は、近代国家として列国の仲間入りをするために富国強兵の軍国主義的諸政策を強引におし進めた。政治・経済・社会・文化の各面にわたり一大改革を断行した。国民生活の面からみても、衣・食・住に西欧の様式をとり入れ、日本人の生活様式をすべて洋風に改めようとした。政府機関に働らく官員が先ず旧来の着物を脱いで洋服に着かえた。ちょんまげを切り落して、総髪にした。「ざんぎり頭」とは、この総髪の

ことで、これをもって文明開化の目じるしとしたのであった。

政府はまた、「家屋は堅固に作るべきこと」という方針を打出し、その手本を政府自らの手で示すことにつとめた。先ず政府機関の官庁の建造物を洋風にしたばかりでなく、東京の町を全部不燃性の建物に改造することを計画し、手はじめに、京橋から新橋に至る銀座通りに、我が国最初のアーケード式二階建煉瓦造りの洋風市街を建設した。

食生活の面でも、洋食を尊重して、牛乳を飲み、牛や豚の肉を食うことが、文明的とされた。東京・横浜をはじめとして大阪・神戸など西欧文化の入口にあたる大都市からはじめて、各都市に牛肉料理屋ができはじめ、そこで牛鍋をつゝき、ビールを飲みながら英語のかたことをまじえて西欧の新知識をひけらかすということをもって文明人なりとすることが流行した。明治四年に刊行された仮名垣魯文作「牛屋雑談安愚楽鍋」には、当時の風俗が活写されている。

年ごろ三十四五の男、いろあさぐろけれどシャボンをあさゆふつかふと見えて、あくぬけていろつやよく、あたまはなでつけか惣髪にでもなるところを百日このかた生やしたるを、右のかたへなでつけ、もっともヲーテコロリといへる香水をつかふとみえて、髪の毛のつやよく……モシあなたエ牛は至極高味でごすネ此肉がひらけちゃあぼたんや紅葉はくへやせん。こんな清潔なものをなぜいままで喰はなかったでごウせう。西洋では千六百二三十年前から専ら喰ふ

やうになりやしたが、そのまへは牛や羊はその国の王か全権と云ッて家老のやうな人でなけりァ平人の口へは這入やせんのサ。追々我国も文明開化と号ってひらけてきやしたから我々までが喰ふやうになったのは実にありがたいわけでゴス……。

しかしながら、こうした文明開化の生活も、実は大都市の一部のものに限られていた。大多数の市民や農民は、政府の意図とその積極的な諸施策にもかかわらず、文明開化からはほど遠い旧態依然たる生活に明け暮れていたのである。特に地方の農村は、牛鍋や洋服に代表されるような洋式生活からは、はるか後方にとり残されていた。吾が群馬県が文明開化の波に、すみずみまで洗われるようになるのは、明治もずっと後になってからであった。

群馬県人の生活が、すでに新日本の文明開化に遠くおくれていたとするならば、それを反映した新しい文学もまた生まれなかったのは当然であろう。文学に関するかぎり、群馬はまだ鎖国の眠りからさめることなく、江戸文学は依然として生きつゞけていたといえる。

江戸時代の識字層といえば、主として武士である。武士の子は幼時に於て漢文の素読を受けるのがきまりであった。素読というのは、先生が先ず漢文を朗読して、そのあとを弟子がついて読むという形式の学習である。先生は、相手が子供であるから、もちろんむずかしい内容の講義などはしない。古典を朗読して、子供にこれを暗唱させるのである。子供は素読を受ける間に、古

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

典を殆どそらんじてしまう。こうして長ずるに及び、漢文の素養は自然に身についたものとなり、自己の思想を文章に表わす場合には漢文ということになる。散文が漢文で書かれたばかりでなく、韻文も漢文で書かれることが多かった。明治初年の文章家といえば、こうした漢文をあやつる武家の出身か、僧侶や神官ぐらいのものであった。したがって、当時の群馬に於ける文学のにない手といえば、こうした特別な人達であって、農民や市民の大多数が文盲に近い状態の中では、文学を愛好する人々もまたごく少数の限られた人たちであった。

漢詩が群馬県内に流行するようになったのは、幕末の文化・文政の頃からだといわれている。その頃の上州の代表的な漢詩人といえば、それは市川寛斎であろう。明治初年の県内に於ける漢詩人の多くは彼の門に学んだ人達である。

市川寛斎は、館林藩士山瀬蘭台の子として生まれ、甘楽郡南牧の伯父の家の市河姓を嗣いだ。江戸に出て昌平黌に入り、朱子学を修めた。三十五歳の時昌平黌の学頭となった。盛んに漢詩文を作り、江湖詩社をおこして弟子の養成につとめた。彼の薫陶を受けて、その門人にはすぐれた漢詩人が多い。高崎藩士の菅谷清成、吾妻の医者の福田浩斎、桐生の井上遂庵、高橋竹中等は、中でもすぐれていた。

武士の教養は主として漢詩文を作ることにあったが、同時に和歌をたしなむものも少なくなか

った。日本古来の和歌は、国学者の間で盛んに作られた。幕末に於ける上州の代表的歌人といえば国学者の橘守部であろう。彼は全国に名を知られた大学者であり、その門人には、学者歌人としてすぐれたものが少なくない。明治初年の県内に於けるすぐれた歌人の多くは彼の弟子であるか、またはその流れをくむものであった。渡辺華山の「毛武遊記」によれば、

守部は今江戸浅草観音の社の後苑に住み、歌学をもて多くのをしへ子あるとぞ。むかし武州幸手宿の人にて、名を庭麻呂と称し桐生・足利の人、多く此門人なり。

とあり、橘本直香・神保雪居・彦部竹崗・武居世平等は数ある守部の弟子の中でも、特にすぐれた歌人であり、その名はひろく県内外に知られていた。幕末から明治前期にかけて県内外で活躍した歌人について簡単にしるすと次のとおりである。

橘本直香。幼名を靱雄といい、後直香と改めた。文化四年山田郡境野村の飛脚問屋の家に生まれた。商号を島屋といい、かたわら機業を経営していた。直香は少年時代から学問で身をたてようと志していた。四十歳の頃まで家業の機屋を経営したが振わず、意を決して家業をなげうち、江戸に出て橘守部の門に入り、国学と和歌を学んだ。薫園と号し、赤坂弁天山に私塾を開いて多くの弟子を養った。群馬県出身ということから、県内から上京して教えを乞う者が多く、彼等はみな帰国して県内にその学燈をかかげた。著書に「姓氏録補闕」四十巻、「万葉集私抄」二十巻、

「上野歌解」二巻など多数がある。明治二十二年九月歿、八十三歳。

神保雪居。名は親道、通称を要造といった。文化六年群馬郡金古町に生まれた。橘守部に学び、橘本直香とも親しかった。多能多芸の人で、書画・俳諧・漢詩文にも秀で、文名県下にあまねく、その門に入る者三百余名といわれる。明治二十四年九月歿、八十一歳。

彦部竹崗。名は周信、幼名を数馬といい、後昇三と改めた。文政七年山田郡広沢村に生まれた。江戸に出て聖堂に学び、漢学を修めて、旗本の田中広家の娘婿となった。後、橘守部に国学と和歌を学んだ。明治六年歿、五十歳。

武居世平。名は公徳、幼名を善次といった。高崎新町に高崎藩士の子として生まれた。橘守部に学び、藩主松平輝声の師範となった。古調園世平と号し、多くの門人に和歌と国学を教えた。俳諧もたしなみ、薫庵と号してこの方面の門人も少なくなかった。明治十四年一月歿、八十四歳。

土屋老平。武居世平の二男として生まれ、土屋氏を嗣いだ。橘守部の子冬照と橘本直香に国学と和歌を学び、和歌・国文・地誌に詳しかった。又、俳名を名胡石文と称し、俳諧に巧みであった。著書に「倉賀野志」一巻、「片岡郡志」一巻、「高崎旧事記」三巻などがある。明治二十年十月歿、四十七歳。

・前原花村。名は美春、幼名を綱信といい、後重世と改めた。文化元年山田郡上久方村大浜の修

験者正覚院胎山の子として生まれた。十一歳の時、竜睦軒瑞令に漢文を学び、後江戸に出て黒川春村の門に入り、国学と和歌を学んだ。二十七歳の時郷里の稲荷神社の神主となり、諸方の祠掌を兼ねた。神職のかたわら、私塾を開き、その門に入る者二百余人に及んだ。著書に歌集一巻、「仮名古事記草」六巻などがある。明治十三年十月歿、七十七歳。

駒井真蔭。通称を源七といい、文政六年十二月緑野郡根小屋村に生まれた。橘本直香に和歌を学んだ。明治三十六年歿、八十一歳。

尾高高雅。幼名を俊助といい、文化九年堀口弥左衛門の子として佐渡に生まれた。十一歳の時、佐渡奉行の書記となり、その早熟な有能ぶりを発揮して、周囲のものから神童といわれた。和歌を好み、若年にして近傍に歌人として知られ、弟子入りして指導を受けるものが少なくなかった。長ずるに及び、学問で身をたてようとして、家督を養子にゆずり尾高姓をなのった。江戸に出て、清水浜臣に和歌を学び、後京都に上り、大江広海に学んだ。専門歌人として、歌道全般に通じた高雅は諸国を巡歴して歌を詠み、天保十三年武州川越に来て、そこに家塾を開いた。文名大いに高まり、川越藩主松平直克に認められて、その歌道師範となった。藩主が前橋に移るとともに、随従して前橋に来て田中町に住んだ。藩主の信任厚く、俸七口の軽輩から次弟に昇進して郡奉行となり、次いで権少参事に進み、藩の政策にも参与するに到り、行政の面でもその有能ぶりを発

揮した。やがて世は明治となり、藩を廃して群馬県となった。県庁が高崎に置かれた時、権典事となって新政府に協力したが、間もなく辞職して歌道に専念した。門人に勝山方教・膳好孝・市村千種園など、明治前期に活躍した歌人が少なくない。明治二十年六月歿、七十六歳。

新居守村。甘楽郡高瀬の人で、僧義門に国学を学び、歌人として名を知られた。又、国語学者として、特に音韻の研究に造詣が深く、この方面の著書も多い。明治二十六年歿、八十六歳。

勝山方教。本名を牧治郎といい、文久元年前橋本町に生まれた。父源三郎は生糸の製造・洋品売買・質屋など手びろく商売をした前橋の有力者であった。幼にして頴悟、六歳の時に小倉百人一首を全部諳記して人々をおどろかせた。学問を好み、尾高高雅について国学と和歌を学んだ。高雅歿後は、東京の黒田清綱子に歌をみてもらい、かたわら佐々木弘綱、本居豊頴等と往来して歌道の研鑽につとめた。明治四十二年「大日本歌道奨励会」が結成された時には、前橋に群馬支部を作り、後進の指導に力をつくした。歌人として活躍したばかりでなく、前橋市の助役をするなど、社会的にもはばひろく活動した。大正十年歿、六十一歳。

膳好孝。伊勢崎の薬種屋の家に生まれた。幼名を万次郎といい、後家を嗣いで、浅次郎と改めた。尾高高雅に和歌を学び、歌人として名をなした。明治二十九年九月歿、五十九歳。

市村千草園。名は良作、幼名を章といった。前橋芳町養行寺の僧行妙の従弟である。隆興寺の

僧全透について漢学を修めた。橘守部の門に入り、国学を学んだ。守部歿後は、その妻登勢子に歌の添削を受けた。尾高高雅が川越から前橋に移って来てからは、高雅の門に入り、和歌を学んだ。利根川より東の地域に於ける歌道の重鎮といわれた。明治三十三年八十一歳の時、九々八十一をもじって、自から八十一翁と号した。

相川半子。境町の中沢広徳の五女として生まれ、伊勢崎の相川次郎平に嫁した。家事をとりしきりながら和歌に志し、尾高高雅の門に入り、女流歌人として名を知られた。歌集に「かたみの紅葉」がある。大正二年歿、七十二歳。

板垣信人。佐波郡境町の人。黒川春村の門に入り、国学と和歌を学んだ。

阿久津盛為。栃木県の生まれ。新田郡世良田村の八坂神社、新田神社等の社司を歴任した。歌人として名を知られた。大正十一年歿、八十歳。

黒川真頼。文政十二年桐生に生まれた。旧姓を金子といい、七歳の時に江戸に出て黒川春村の門に入り、国学と和歌を学んだ。幼時から秀才のほまれ高く、十七歳の冬、毎晩「草野集」を読み、一ヶ月で全巻を暗誦した。春村には子がなかったので、多くの門弟の中から抜擢されて後継者となり、黒川姓をなのった。学者として明治の国文学界に活躍し、明治十四年帝国学士会員、二十一年御歌所寄人、同年文学博士、明治二十六年東京帝国大学文科大学教授となった。歌人と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com